

■ 歴史学者にとって「当たり前」で、一般の社会が忘れてしまっていること。

歴史学者にとって「当たり前」で、それがために一般の社会が忘れてしまっていることがあるのではないか。もちろん、その原因には歴史教育の問題、例えば歴史の授業を真面目に勉強しなかったとか、大きな流れの本質を教えないで、ただの暗記科目となってしまうとか、教科書が悪かったとかいう状況があるかもしれない。

けれどもこのことは、この連載でも強調してきたように、歴史的事実と社会的記憶のくあいだ>にある問題でもある。

歴史学者はあくまでも歴史的事実の専門家であって、社会的記憶の専門家ではない。歴史学者が調べた歴史的事実は、特段啓蒙の努力をしなくても、そのうち国家によって公教育で教えられるようになる。もちろんそのことで、研究の価値は証明されている。

決定的な新史料の発掘が政府の公式見解を変え、われわれの認識を変え、社会のありかたを動かす、ということも確かに少なくない光景だ。その価値は計り知れない。だから歴史学者は、歴史を探究し事実を示し続けていさえすれば、社会（普通の人々）がどう思おうと関係ない、あるいは自動的についてくる（べき）と考えているのかもしれない。

けれども「決定的な史料の発掘」を求めて博搜しても、解釈にかなりの幅がある史料しか出てこない場合も十分あり得る。そこで激しい論争が起こる。決定的な史料が出てこなければ、そのあいだ、ご都合主義の社会的記憶が幅をきかせてしまうだろう。史料が出てくるまで我慢する？ そうではなく、並行して、社会的記憶の性質・特徴を学んで、なぜそうなのかを考え、工夫を施すべきなのではないのか。歴史は大事だけれども、それが一般の人々の主観でも当然、とは思えないのである。

それは自分の仕事ではない（例えば、「大河ドラマなんて相手にしてられない」など）と歴史学者が考えるのであれば（それはそれで仕方がないとも思うが）、この連載のように、代わりに社会学者がその仕事をすることになる。

さて、以前この連載で、過去を知る人々が「あたりまえ」と考えてあえて強調しなかったために、やがて時が経って却って見えにくくなってしまったことがあるのではないかと書いたことがあったが、これに加え、歴史学者が「言わずもがな」としてしまったことで、「普通の人々」を歴史から遠ざけてしまっているということがあるのではないかということ提起したい。

例えば「従軍慰安婦」の問題も、研究者と人々が乖離してしまっている最たる例の一つであると思う。次のことは歴史学者にとっては「あたりまえ」のことだろうが、これを呈示しただけでも、一般のこの問題への認識は深まるはずだ。

①当時は公娼制度があったこと、②戦地の慰安所には日本人慰安婦もいたこと、③（国内外を問わず）軍隊が大量の性的サービスを必要としていたこと（＝割合はともかくとして、軍隊という人の大集団にはその希望者がそれなりに数多くいたこと）、④需給のバラン

スから、選んで慰安婦になった人もいること、ただ⑤軍の「ニーズ」はそれ以上にあり、条件がそれなりに良くてもなり手が絶対的に不足していたこと、⑥経済的困窮により、親に売られた女性もいること、そうしたなか⑦詐欺的手段を厭わない斡旋業者が暗躍したこと、やがて⑧それは官憲の眼にも留まり問題化され、悪質な業者は摘発されることもあったこと、とはいえ⑨軍と警察のあいだの調整を経て「黙認」されることもあったこと、⑩それでも需要が満たされないときには、「非常の手段」が執られる可能性は十分にありえたこと。

どうだろうか。何を当たり前のことを！ もうそんなことは当然〇〇先生の『〇〇』に書いてある！ 「もう議論はもっと先に進んでいる！」……だろうか。読まない人々が悪い？ 読んでもらうための工夫は、誰がすればいいのだろうか？

特に⑩が慰安婦問題の議論でよく争点化される「強制連行」の有無や定義に関わる部分である。が、ここだけが強調され、そうなる文脈である①～⑨が十分に示されていないように思う。社会学者なのでいずれ（そう遠くないうちに）「一般の人」の認識を調査してみたい。①～⑨の事実をほとんど知らず、⑩の論点だけがどぎつく意識されているのではないかと予想する。そして、そこから認識が深まらないのではないかと。

一方、①～⑨には「都合の悪い事実」も含まれている。「選んで慰安婦になった人もいる」というのはその一つだろう。ただそれは、あくまでも「そういう人もいた」という話である。あるいは、慰安婦と買春者とのあいだに「心の交わりがあった」場合のことも。

「～場合もある」「～こともあった」と書くことは、留保を装いつつもちろん一定の免責になってしまう。その文言をみつければ、「慰安婦」の悲惨な状況に思いをはせつつも、ささやかな安堵を覚える人がいるだろう。一方そんなはずはないと考え、そうした人々に対して反省的認識が足りないと非難したい人もいるかもしれない。ただ問題は、それらを示した「後」である。

この問題の本質は、軍の性的需要が歴大だったことだ。それを背景として考えれば、「慰安婦」には、「稼ぎを得ていた人」と「(文字通りの)強制連行された人」とを両極端として、そのあいだで様々に分布している。両者とも「巨大な需要」が原因で起こることである。現象としてふたつは矛盾しない。

もちろん売買春そのものが全て問題だという立場（入り口である①を問題化する）もあるだろう。そうすれば問題は「慰安婦」そのものではなく、いわゆる「性的搾取」全てになる。④も性的搾取に本人が気づいていないだけ、ということになる。そういう視点も示しうると思う。あるいは、ある構図からすれば、たとえ「慰安婦」が笑顔で接していても奴隷的だったのだ、という視点の取り方だってありうる。

ただ、いま逆に幅をきかせているのは、文字通りの「強制連行」が公然と行われていたことを裏付ける証拠がなければ、「慰安婦」は「性奴隷ではない」とする主張だ。少し付け加えればそれは、この連載でも以前示したとおり、「奴隷」をめぐる想像力の貧弱さにも原因があるようにみえる。奴隷とは足首に鉄球のついた鎖を巻かれて農園で働かされる者だ

けではない。そのイメージに近い現在からの想像力を絶対として、「強制連行」が議論されている。

「足首に鉄球」は、奴隷の典型の一つではあるけれども歴史上、様々な奴隷のかたちがあった。だから「慰安婦」が奴隷「的」であるかどうかは結局、何を問題とし議論したいかによって変わってくるし、その定義のすりあわせをしない限り議論は平行線である。

多くの証言で聞く、兵士たちが慰安所の前で行列を作っていたという話。一日に何十人もの相手をした「慰安婦」もまた、奴隷「的」であろう。否定派は「でも（あるいは、だからこそ）給料は良かったんでしょ」とこともなげにいうだろうが。

であれば「奴隷的」の定義を、連れてこられてきた経緯（自発か強制か）や稼ぎ・待遇の良し悪しや日本兵との「人間的交流」の有り無しではなく、端的に自由に「辞める」ことができたかどうかによればどうだろうか。「利用者」としての軍隊がすぐ近くにみえる環境で、「辞める」自由があったかどうか。

⑨の「黙認」も微妙だが、実は問題の本質のもう一つを作っている。「事実上そうだった」ことは動かしようがなくとも、決定的な証拠を残さない（ようにする）のが「黙認」である。それはどのようなものであれ、後世の言及を「解釈のひとつ」にしてしまう可能性をもたらす。もちろん「黙認」の「黙」は、なるべく残さないようにするという意味ではあるが、証拠を残してしまうこともある。また「認」のほうは、結局認めているということなので、証拠が見つければ法的責任が問われることになる。だが、そもそも証拠を残すのなら「黙認」ではない。逆に言えば「黙認」ではもうコントロールできないときに、証拠が残るわけである。ただやはり、解釈の幅が生まれがちなのは事実だ。

ニーズは膨大、けれども公然とは行われていない、というのが「慰安婦」問題の本質ではないだろうか。それらはすべて「議論の余地を残す」ことに繋がる。であれば、その「議論の余地」にむしろ向きあうべきではないのか。そしてそれは社会的なものはずだ。

結局、どんな論争でも議論をするための定義の共有が重要で、あるいは少なくとも定義の提示が必要である。それにもかかわらず、定義が示されず、定義や議論の論点を明確化するための事実が「当たり前」だとして示されていないようにみえる。どういう前提にたち、どれだけの解釈の幅のなかから、何を選び取ったのか。それを社会に示すべきだ。

もちろん、「研究」とは、焦点や論点を明確にして、手続きを厳密にして着実に進めなければならぬものである。それゆえ問題を鋭く絞り込む必要があることは分かる。論点に集中すれば、周りが見えなくなることもあるだろう。大きな研究の構図のなかでみれば、批判したい先行研究とはむしろ距離が「近い」はずだが、近くても何らかの「違い」を示さなければならないのが研究の世界の常だから、研究者として誠実であればあるほど、その「近さ」が逆に乗り越えなければならない「壁」として示される。

だが一般の人にとってその違いは「どうでもいいこと」だ。まずはもっと基礎的な事実、大きな構図のほうを知りたいはずである。そのうえでこそ、その「壁」の意味が分かるはずだろう。

ところで、理系の多くの分野の研究者は、新書や啓蒙書を書くことをあまりしないという。研究業績にならないからというだけでなく、そんなことをしたら研究者としての（仲間内での）評価が下がるそうである。一般社会に還元する啓蒙が不可能なほどに専門が深く狭いということなのだろうか。

歴史の研究者はどうだろう。たとえ専門が深く狭くとも、「あたりまえ」と今一度向きあい、社会的記憶と向きあう必要があるのではないだろうか。そう考えると、「歴史を体感する」必要は、その専門家であるはずの歴史研究者にもあるのではないかと思うのである。

そして、そのためにもこの連載原稿を書いているつもりである。